
弱いからこそ強くなれる！

かみかみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱いからこそ強くなれる！

【Zコード】

Z7277V

【作者名】

かみかみん

【あらすじ】

人生っていうのは予想外の連続だ。 だつてさつきまで寝ていたはずなのに気が付いたら……猫ですよー？ そして始まる異世界での俺 in 猫（？）な生活

第一幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

第一幕

ファンタジーな世界というのは誰しも憧れを抱く事があると思う。フとした拍子に読んでいる漫画の世界の主人公に自分を置き換えてみたり、人によつてはその想いを物語にしてネット上に掲載する人もいるはずだ。

人は常日頃から軽く現実逃避をする瞬間がある。ストレス社会の中における発散方法の一つといつたらそれまでなんだが……

しかし、幾ら憧れを抱こうが、所詮は絵空事。

実際はそんなことが起きるはずがない……と言つのは常識と言つても過言ではない。寧ろ本氣にしている奴は少しばかり病んでいる可能性が濃い。

勿論、俺のなかでもそんなことは起きる筈が無いつていつのは常識だつたし、そこまで現実を捨て去つた覚えもなかつた。

さて、聰明な方なら、今し方俺が言つた言葉の真意に気が付くことだと思つ。

……ん？ 真意も何も、変なことは言つていないってか？

いやいや、少し前の文章をきちんと一字一句読らさずに読んでみ。俺はこいつ言つたんだ。『現実を捨て去つた覚えもなかつ『た』』

つてね。

つまりはそういう事だ。わざわざ過去形に言い直したんだ。何かあつたと言つた事は簡単に想像がつくだろう。

……うん、現実逃避はこれくらいにしたいと思います。取り敢えず一言だけ言わせてくれ。

『 にーににに？（どうしてこうなった？）』

今の俺の言葉を聞いて今現在俺が陥っている状況をぴたりと答えることができた奴は間違いなく賢者であり、超能力で俺の心の内を読める奴だと思う。

さてさて、先に言つておくが別に街中を歩いていて運転手が居眠りしているトラックにぶつかつたり、隕石が直撃したり、美少女に背後からナイフでズドン！ … ってされた訳ではない。

俺の記憶が正しければ、例年に見ない猛暑の今年、夏の暑い盛りの昼間にクーラーの壊れた講義室にいた筈だ。決して広くは無いその部屋には学生が100名程缶詰め状態になり、その前では大汗をかきながらもスーツを着ていたバー・コード禿の教授が自分の若かりし頃の武勇伝を語りだしていた。

勿論、殆どの学生がそんな話をまともに聞ける状態では無く、うちわを扇いで凌ごうとする奴、誰かれ構わず話しかけて取りあえず暑さを紛らわそうとする奴、耐えきれずに夢の世界へと旅立つ奴。そんな状況下に俺はいた。

そんな地獄ともとれる暑さの中、昔の武勇伝を聞かされても得なんて無いと判断した俺は熱気で温められて不快感の塊へと変化した机に突っ伏して夢の中への逃避を行つたというのは覚えている。

まどろむ意識の中、額を汗が伝つていく嫌な感覚と講義室に響く教授の声が段々と遠ざかっていくのだけれどなんとなく覚えている。そしてふと気が付いたら……

「 にに？（毛？）」

なぜ毛？しかも、人がある様な薄い毛じゃなくて結構濃

い毛だし。更には何だか銀色っぽい。いや、そもそもなぜ知らぬ森の中？此処日本かよ？つていうか、今更ですが何で俺の身体にこんなに沢山の毛？いやいや、それはさつき考えたから。

じつは一度死んで生まれ変わりましたってネタは幾分か聞いたことがあるけれど、俺寝てただけだし！寧ろ、そもそもすきて何に突っ込んで良いのかすらわからねえ！？

いや、少し待て俺。この毛は間違いなく動物のソレ！つまり、何かの動物になっちゃったという事か？つまりはテレビを見ることも出来なくなつて手なんか肉球なんだからゲーム機すら持てなくなつて……ああ……折角始まつた連ドラも殆どみれてねえ！ああ！しかも、先週買つたばかりのゲームを全然プレイできてねえし！

……人間つてあれだな、あまりにも常識はずれな事が起きるとマジで混乱して訳の分からん事を考え出すもんなんだな。

今まさに現在進行形でソレに直面している俺だからこそ吐ける言葉だなコレ。

と、取りあえず少し落ち着け俺、冷静になるんだ俺。自分でも言つていたではないか。俺は確か大学の講義中に居眠りをしちまつたんだ。だったらこれは夢と言つ可能性が半端無く高い！

だつてそうだろう？最後の記憶が居眠りした所で終わつていて、気が付いたら動物だぜ？

……しかし、そんな俺の淡い期待も数秒後には『疑問』という無常な言葉に姿を変えていった。なぜなら

ザーザー！

ザーザー！

「……にい（冷たい）」

突然降りだしてい待った豪雨とまではいかないが、それなりに勢いのある雨が俺の体に直撃しているからだ。そのせいで徐々にだが冷えていく俺の体……

……夢の中で雨？ しかも冷たいとか感じるだつて？ 本当にコレって夢…なんだよね？ と、取りあえず、仮に夢だとしても雨に当たつているという不快感MAX状態を脱する為にも雨が凌げそうな所を探したほうがいい。

そんなこんなで俺は雨が凌げそうな場所を探す為に歩き始めたのだった。

さて、何だかわからんねえけれど横穴があつてラッシュキーだつたぜ。

取りあえず、雨風を凌ぐために其処ら中を歩いていると割と近くに良い感じに掘られた横穴を発見した俺は直ぐ様そこにかけ込んだ。しかしあれだね。動物になつたつて事だから一足歩行じゃなくて四足歩行での移動だつたんだけれど、思いのほか四足歩行つて簡単だつたな。だつて、歩き始めなんて四足歩行だつて言つ事を忘れてしまう位自然な歩き方だつたんだぜ？

……そんな別の事を考えて気を紛らわせることよりも、今は状況の判断の方が先だと思つ。

さて、仮に今俺がいるこの世界を夢だとしよう。この一言で片付いてしまえばどれだけ楽なのだろう。

だって、後は眼が覚めるまで待つていればいいのだから。しかし、それは先程の雨の冷たさから薄まつてしまつた。夢である以上、視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚のうち視覚・聴覚以外は殆ど無いものと言つてもいい。……いや、正確には五感全ては無いんだが、この二つは想像でどうにでもなる。

ソレを踏まえて俺の状況だ。先程の雨の冷たさ…さらば毛越しではあるが雨粒が身体に当たる感覺、更には歩いた時に感じた足底に感じた地面を踏みしめる感覺。どれも夢からは考えられない感覺だ。これだけでも、夢である可能性は低い。更にもう一つ言つと、夢と言つものは寝ている間に記憶の整理をする時に現れるものである。其處には自分の意思は殆ど無く、自分でソレを夢だと認識する事はほぼ無く、自由に動き回れることもまず無い。しかし、今の俺はどうだらう?自分の意思はハツキリと保つことができ、更には……

ヒヨイ、ヒヨイ

俺は前足を少し上げて、犬の「お手」の様なポーズを取つた。

「このように手足も自由に動かす事が出来る。……この時点で「夢」という選択肢はついたと言つてもいいだろう。

さて次の仮定だ。俺が何らかの「動物」になつた。

……うん、どういう経緯でこつなつたのかは分からぬけれど、これを事実とした場合が一番しつくりと来る。

感覚があるのも今俺がいる世界が現実だということがわかるし、

俺=動物になつたと考えるのが妥当なかもしない。

残念すぎる答えだが、それが答えである可能性が一番高い。しかし、だからこそ疑問に思えることがある。

色々と世の中の整理云々をぶつ飛ばしまくっているが、なぜ人間の俺が動物に変化しているかということだ。

そこでふと、先程まで考えていたファンタジー的な言葉を思い出した。

『転生』

仮にこの一言で解決できるとしたら、ある程度の辻褄は合つ。講義の最中、何らかの理由で死んでしまったと仮定する。……仮定したくは無いが。

と、取りあえず、転生というものが本当にあるとしたら、それに俺が当てはまつたと思えばいい。むしろそれ以上の答えは今の俺には出す術はない。

自分が死んだかもしれない……その言葉自体は割りとあつさり受け取ることができた。

そもそも、将来のビジョンも何も無くただ単に大学生活を送つていた俺からしてみたらお先真っ暗な世界に大きな未練は残していない。……いや、家族とか友達とかは未練タラタラだし、見たいテレビもあるしゲームだつてしたい。

だけれど、それ以上に生きる事にさめてしまっている自分がいた。それは紛れもない事実だ。

あと数ヶ月もしたら就職して生きるためにセカセカ働き通していく人生だった。……いや、周りはそうかもしれないけれど、少なくとも俺の就職は未だに決まっていなかつた。そんな中でもあせる表情

することなく淡々と毎日を過ごしていた俺だ。いつかは潰れていたと思う。

だつたら訳の分からぬまま始まつた俺の第一の人生を楽しむべきではないだろうか？ 人間でない以上、働く必要は無いし、食べて寝て食べて寝てを繰り返す日常を送ればいいのだから。…いや、それは幾らなんでもないか。

どのように生きていけばいいのか分からぬのは現在も一緒かもしない。人が住んでいる気配ゼロの森の中にある洞穴で雨宿りをする俺。食料はどうすればいいのか？仲間とかはないのだろうか？俺がなつてゐるこの動物は何なのか？ この森には天敵はいないのか？

さまざまな事が俺の頭を過ぎつて行く。何となく自分の手…いや、前足に目をやる。そこには突つついてみたくなるほど小さくて可愛らしい肉球がある。しかも、小さいながら人の皮膚なんかは簡単に切り裂く事が出来そうな鋭い爪が見え隠れしている。

比べるモノが無いからどれくらいの大きさかは分からない。前足から視線を外して今度は洞窟内を見回してみる。今の俺の体がどれくらいの大きさなのは分からぬが、人間の視点寄りは間違いなく低い。更に言うのであれば、その辺に生えている雑草にも背丈は負けている。

考えたくは無いが、見た所犬と言うよりも猫に近い丸みを帯びた俺の手そして、明らかに小さすぎる俺の視点の高さ。

…つまり、猫になつた可能性が一番高いという事だ。

いや、だからこそ分からぬ所もある。俺の記憶が確かならば猫とは母猫が付きつきりで世話をする動物だと認識している。いや、猫だけでは無くネコ科に属する動物は勿論のこと、寧ろ哺乳類のほとんどがそういう生態の筈だ。

しかし、俺の近くには母と思われる動物の存在は認めていない。それどころか、俺以外に動く影と言つたら雨風によつて不気味に搖

れでいる木の葉と雑草ぐらいなものだ。

簡単に考えたら殆どの動物が何処かに身を潜めて雨宿りをしているのだろう。結構強い雨だ、下手をすれば低体温症なんて者も考えられる。そうなつたら野生の動物では命にかかる可能性だつてある。

実質、俺の小さな体は少し当たつた雨の所為で大分冷え切つてしまつている。意識はしていないが足なんかは結構振るえている状態だ。最も、直ぐに洞穴に入つたおかげで幾分かは身体が暖かくなつてきた。

……クウ

そんな時、洞窟内に何やら可愛らしくぐもつた音が響いた。決して大きくない音であつたが、雨音以外の音は以外と響くものであるようだ。一瞬、別の生物がいるのかと思い洞窟の奥へと慌てて顔を向けた。しかし、直ぐにその音の発信源が何処だか理解した。

「に……ににい（腹……へつた）」

まさかのまさか、どうやらこの小さな俺の腹から発せられた音のようだ。ソレを理解した瞬間、言い知れぬ空腹感が俺を支配した。赤ん坊と言うのは思いのほか腹が減るのは早い。どうやら、ソレは人間だけでは無く他の動物にもいえることなのだろう。少なくとも俺がこの体になつてから、一時間は経つていない筈だ。この体になつた瞬間は少なくとも空腹感を感じていなかつた。つまり、この一時間でお腹がすく程、燃費が悪いという事……

弱つた、果てしなく弱つた。この体が子猫である以上、主食となる者は母猫の母乳だろう。最も、俺がソレを素直に飲むかは別なんだが。俺だって記憶上、数十分前まで人間だった記憶がある。

ソレがすんなりと猫化してたまるものか。

これが人間の赤ん坊になつたら、まだ人間の母乳と言ひつ事で少しは譲歩できたが、何が悲しくて動物の母乳を飲まなければいけないのか。 それだつたら、その辺の水を飲んだ方がましだ。

さて現実問題、腹が減つた俺が何を食せばいいのかが問題だな。母猫がいなくて、さらに母乳を飲みたがらない俺。 要は、ソレに変わる食べ物を調達しないといけないという事だ。

？ 離乳期を過ぎていなければどんな食べ物だつて消化不良を起こして吐いてしまう。

まあ、物は試しだ。 猫つて確かライオンやチーターと同じく肉食だつた覚えがある。 あるいは、魚を咥えて走つているイメージもある。 仮に動物の肉を食する場合は半端ない覚悟が必要だ。さつきまで人間だつた俺に生き物を殺して食べるなんて覚悟が果たしてあるのか？ こうやって言葉にして言つるのは簡単だが、普通に暮らしていた奴には結構、酷な作業だ。 ソレに根本的にハンティングなんものはやつたことがない。

その点、魚の場合は生で食べるという世界的に見ても稀な食文化をもつ『日本人』だつた俺からしてみたら罪悪感という観点から言うと、肉を食べる事よりも幾分か低い。

それに、元々俺は肉よりも魚派だ。 しかも、好物は魚の刺身ときている。 最も川魚の刺身は残念ながら食べた事は無いんだけれど……

しかし、今は四の五の言つてゐる時ではない。 正に文字どおり生きるか死ぬかの選択肢に近い。

そうと決まれば、早速行動に移してみないといけないんだが……

相も変わらずの大雨の前で断念せざるを得ない状況であった。

それに、よく考えたらどうやって魚を捕るんだ？

釣竿はない、あつても持てない。素手で捕る技術なんてあるはずもない。

……あれ？ もしかして積んだのか？ いやいや、少し待てよ俺。この体は猫（？）と言えども頭脳は元・人間なんだ。こういう時にこそ頭を使うんだ。

この体は可愛らしい猫（？）なんだ。もしかしたら人里で餌付けをしてもらえる可能性がある。……しかしながら、この森の中を空腹状態で尚且つ豪雨という悪条件真つ只中を何処にあるかも分からぬ人里を探すのは流石に無望か……それに、此処が日本とは限らない。下手をすれば海外の樹海のど真ん中という可能性だつてあるんだ。うん、この案は却下だな。

さて、次は野良っぽく残飯を食つてみよつと言つ案だが……これは有無を言わせずに却下の方向性で。

必要に刈られたらやるかもしぬないが、流石にこの案に縋つては生きていたくないかな。

・・・・・

……ふう、色々と考えたがこと、とく却下な展開になつたな。

しかし生きていく以上、何かを食べなければ餓えで死んでしまつ。

いつそのこと、その辺に生えている植物でも食べてみるか？

：

…いや、これは一番やつちやいけない選択肢の筈だ。猫にとって植物は有害なものばかりだと何かの番組で見た覚えがある。

…こうなつたら一番は魚、よくて肉、餓死寸前になつたら昆虫などで手を打つ事にしよう。幸い、ヘボ（蜂の子）やイナゴは爺ちゃんや婆ちゃんの影響で、それ程嫌悪感は無い。でも、出来ることなら人らしい食事がしたいぜ。

そんな事を心中で一人愚痴りながら俺は食糧を求めて洞窟の奥へと足を運んだ。洞窟内はひんやりとはしていたが、決して寒いという事は無く快適な温度を保っていた。しかし、その分何故だか湿度が異様に高いと感じられる。つまり、この洞窟の中に水に關する何かが存在するということであろう。

もしかしたら地底湖か……いや、もしかしたら海に繋がっている可能性だって否定できない。自分が生きる為に食料を調達する為に洞窟内を一人進んでいるが、まるで『冒険』をしているかのような気分になり少しだけテンションが上がつてくる。

しかも、洞窟内は暗かつたが俺のスペックが猫に変化していることもあり夜目がきいていた。更に、時折外に繋がっているような穴が天井に開いていたため、難なく洞窟の奥へ奥へと進むことができた。

時間にして2時間程歩いだらうか。俺の進む足が止まった。

別段空腹が限界値を超えた訳ではない。ただ単に洞窟の最深部にたどり着いてしまつただけである。その間、湖などは存在せず辺りはジメジメした壁だけであつたが、最深部は如何やら勝手が違つていたようだ。

まるで人が作つたかのようなドーム状にひらけている。しかも、今まで歩いていた所とは違い、完璧に外界と接触する部分は存在しない。しかし、どういう訳かこの中は闇に支配されていない

のだ。

原因は直ぐに分かつた。 専門的な事は詳しくないが、ドーム内の至る所に薄らと青く光り輝く鉱物が存在していたのだ。

漫画やゲームなどでは幾度となく存在する魔鉱石のようなものだと第一印象で感じてしまつた俺は途轍もなくロマンもへつたれも無い人種かもしだい。

しかし弱つた……俺はこの洞窟内を観光しに来たのではない。 食料を求めてきたのだ。 だが、この洞窟内には猫が食べられそうなものは何一つ存在していない。

キュウ～グルル……

大した働きもしていないのに自己主張ばかり強くなつてゐる自分の腹に少しだけ苛立ちながらも俺はドーム内を食べられるモノがないかを必死になり探しまわつた。 しかし、ドーム内にあるものは岩壁と光り輝く不思議な鉱物だけで、俺の食べられそうなものは存在していない。

この際、なりふり構つていられないと持てそうな小さな石をひっくり返して虫が居ないかも確認した。 しかし、結果は残念なものであり、俺以外に生命活動をしている姿を確認する事は出来なかつた。

如何やらこの洞窟には食べ物は存在していないようだ。 散々な結果に軽く目眩を起こして倒れ込みそうだったが、其処は気合で自分の足を奮い立たせて地に足を付けた。

しかし、そこで新たな問題が発生してしまつた。 俺は此処に来るのでに2時間以上洞窟内を歩き続けたのだ。 さつきまではある程度の余裕があつたが、空腹が結構限界まで来た俺に果たして戻るだけの体力があるのであろうか？ 新たに直面した問題に今度こそ目眩を起こして地面に転がるうとしたが、その時俺の視界にとある

ものが入ってきた。

別だん見慣れないものではないし、今まで何度も見てきたものだ。しかし、だからこそこの場に会つたら限りなく不自然なものである。寧ろ何故今の今まで気がつかなかつたのかが不思議に感じるものである。

「……に？（扉？）」

一枚岩を削つて作つたであろう、俺の視界には重厚な出来の岩で出来た大きな扉が入つてきたのだ。

第一幕（後書き）

読んで頂きましてありがとうございます。

この話は以前から考えていたもので、掲載する予定は無かったのですが
すがりハビリ的な意味で掲載していきます。

当然の如く更新速度は遅く、二次創作の方を優先して書いて行き
ますので、偶に覗いて頂けると光栄です。

第一幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

人と言つ生き物は何か未知なものが眼前にあると、パターンの行動に移るものである。一つは未知なるものに対して恐怖し、深く関わろうとしないタイプ。そして、もう一つが……

「…………ににに……にに？（…………なんだ…これ？）」

ただひたすらに己の欲望のままに動いてしまうタイプである。こういうタイプ分けは後々にその人の生活に大きな影響を残す。前者のタイプは企業に就職した後、出世もある程度して普通に暮らしていくタイプ。後者のタイプは自分から会社を興して大成功を収めるか、身の破滅を呼ぶタイプ。

大まか過ぎるわけ方ではあるし、そもそもこれ通りに当てはまらない人間だつている。そして、この人間から猫（？）になつてしまつた男は限りなく後者のタイプであつた。

これ以上何にも失うことのない恐怖感諸々が無いこの男にとつてその先になにかがあるかもしれないその扉は自身的好奇心を刺激する分にはちょうどいいものであつた。

足元を少しふら付かせながらもその扉に近づいて行く見た目子猫の男。その視線はまるで魅了されたかのように扉を一身に見つめている。内なる思いはただ一つ。

「に…………ににに？（飯…………あるかな？）」

とにかくにも自身の空腹を満たす事のみである。恐らく今、彼の目の前に何かしら自立で動くものがあれば、それがたとえ見た目がグロい芋虫であろうと強靭な皮膚を持つ巨大な草食獣であろうと、明らかに食物連鎖が逆転しているであろう凶悪な肉食獣であろ

うと分別なく噛り付いている事であろう。

そして、彼は扉の前に到着した。 いざ田の前に来る
と、遠田で見た時よりも重厚で凶悪さが伝わるような程、頑丈に出
来ている扉である。 岩で出来ていて、恐らく核でも打ちこまれ
ない限りはこの扉が破壊される事は無いという考えが一瞬だけ頭を
よぎったが、その考えは直ぐに捨て去り、扉の向こう側へ向かう為
に更に近づく。 幸いなことに扉は閉まっておらず、子猫の身体を
持つ彼ならばなんとか通る事が可能な位、凡そ10?弱の隙間が開
いていた。 ある意味で幸運とも取れる事ではあるが、そんな状況
は今の彼にはどうでもいい事であり、通る事が出来るのなら通る。
と言つ考えしか浮かばない状態であった。

少し狭くはあるが、隙間を難なく通りぬけた彼は小さな部屋へと
入った。 先程の部屋とは違い、光る鉱物もなく外への亀裂なども
ないその部屋は人間の目から見たら暗闇であつただろう。 しかし、
猫へと変化した彼の眼は僅かばかりの光により少しずつではあるが
この部屋の全貌を確認できるようになつていて。

凡そ十畳の狭い空間であるそれは、先程のドームよりも明らかに
異質であった。 まず、今の岩の扉自体も自然に作り出されたもの
ではないという事は分かる。 幾ら彼が空腹で混乱しているとはい
えソレは分かる。 しかし、それ以上にこの部屋は何かがおかしい
のだ。

「にに…ににに…にににに? (剣…鎧…人間がいたのか?)」

そう、其処には何処の誰が装備していたか分からない剣と鎧が飾
られていた。 白銀に輝く鎧、更には金の装飾がなされたおとぎ話
に出てくる魔王を打ち滅ぼすとされている『聖剣』を彷彿させるか
のようないつも… そう言つた剣などの武器に関しては全くの素人であ
る彼ではあるが、そのあまりの神聖さに暫し心を奪われ、呆けた表

情でそれらを見つめていた。

時間にして10分程であるうか、彼はふとした拍子に我に返った。
確かに空腹ではあるが、それを見出されたためではない。……
いや、確かにそれには関係している事ではあるが、ある意味でも自身の五感が鋭くなつた為に感じたものだと思つ。

「にににに……にに？（甘い……香り？）」

鼻腔から入つた匂いは確実に空腹である彼の胃と脳を刺激した。
しかし、こんな洞窟の奥深くで何故甘い香りがするのかが疑問ではあるみたいだが、そんな事は最重要事項（空腹）に比べたらどうだつていい情報である。

彼は慌てて狭い室内を見回した。十畳という狭い空間の中央には剣と鎧が飾られている。一見するとそれ以外には何もないようを見えるが、それは違うと彼は直ぐに判断した。鎧に隠れて死角になつてはいるが、その先……鎧の後ろ側にはまるで祭壇の様なものがあつた。何を祭つているのか、はたまた何かを封じているなど様々な憶測が脳内に手飛び交うが、其処に彼の目当てのものはあつた。お供え物だらうか？ 祭壇の中央の高さが20？程の壺の様な物のから甘い香りは漂つてくる。

「ににににー（食いもんかー）」

彼は先程までの口口口口の足から打つて変わり力強く地を蹴り、丸でとび跳ねるような勢いで祭壇へと飛び乗つた。祭壇の高さは1m以上ある場所にある。しかし、彼は子猫がその高さを一気に登るという異常さには運がいいのか悪いのか、この時は気付かなかつた。

そんな事は露知らず、彼は躊躇無くその壺の蓋を肉球のある両手で器用に開けた。

「…………にに？（…………餡？）」

開いたその中には何故かビー玉を思わせるような透きとおった丸い物がゴロゴロと2・30個はあるだろう。……まあ、確かに食べ物には違いない。しかし空腹の彼にとつてはある意味で絶望に近いだろう。空腹でやつとの思いで見つけた甘い香りが全て餡玉だとわかつたら。そんな中、彼はどういふと……

「にににに（取りあえず食うか）」

……まあ、中には例外もいるという事で。彼は壺に頭を勢いよく突っ込むと、勢いよく餡玉をかじり出した。餡玉は意外と脆いみたいで、子猫である彼の顎の力だけで難なく噛み碎かれていく。ただ、餡玉だというのに……甘い香りを発していたというのに……いざ食べてみると全く甘くないのは何故だろう？と呟いた彼の声は真っ暗な部屋の中で『にー』と可愛らしい鳴き声と共に響いていった。

「味……殆ど無かつたじゃねえか」

まあ、ある程度空腹が満たされたから良かつたけどよ。 そりや、食べてから気が付いたんだが猫って餡玉食べても大丈夫な動物だつたか？…………やめよう、食べて体調を崩したらそこまでだし。

そんなことよりも今は空腹がある程度まで満たされた事を喜ばないと。

「さて、今からどうするか……ん？」

……あれ？ 何かが変だ。 だけれど何が変なんだろう？ 視線の高さは変わっていないし。

自分の前足を見てみると先ほど見た銀色の小さな猫っぽい前足がある。 つまり、身体的なものは変化している訳ではない。

「だつたら何が……うん？ 何だらう… 話したら途轍もない違和感が… つて俺、言葉話してねえか！？」

違和感の正体には以外と直ぐ気がつく事が出来た。 だつて、つい数分前まで『にー』しか話せていないかった筈の俺が気が付いたら言葉を話しているんだぜ？ まあ、どちらかと言うと『にー』つて話していた時の方が一番違和感があったもんだから元に戻った為、気がつかなかつたのだろう。

しかし、これはこれで弱つた。 そもそもの要因が全くもつて不明白だが、話す猫だなんて明らかに人に見つかつたら珍獸扱いされてしまう。 ……いや、今の時代話す猫とか犬とかはテレビに出てくる時代だ。 もしかしたら、俺もそんな中の一員に。

「無理だな」

・ · · · ·

今軽く想像してみたけれど、間違いなく俺みたいに流暢に話す動物がいる筈がない。

しかし、これから的事を考えると頭が痛くなつてくるが、こうなつてしまつた以上、前向きに考えなければいけない。 どんな因果が分からぬいけれど、話す事が出来るようになつた以上、これを頑張つてプラスに働かせるようにしなくては……それに、ここで泣きわめいた所で元の生活に戻れるかと聞かれたら限りなく皆無だ。

そして、このまま絶望したまま死ぬという最悪な選択肢をチヨイス

してしまつたらそれこそ命に対する冒瀆である。

だつたら、この猫（？）ライフを田一一杯楽しむなれば損だと思う。 僕は無理やりにでも自分にそう言い聞かせて洞窟の出口を田指して歩き出した。

第一幕（後書き）

ありがとうございました。物語を書くにあたり、初めて三人称を行つてみましたが、難しいものですね。どなたか、コツなどを教えて頂けると幸いです。

では、感想＆ご意見はいつでも受け付けてあります。

第三幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

よお、俺だ。あの飴玉を食つたあと、俺は洞窟の入り口まで戻つたんだ。なんて事はない。ただ、雨が止んだかを確認するためだ。俺は行きの時とは何の変化も無い洞窟を戻つて行つた。洞窟の隙間から差し込む光は行きの時とは違ひ少し赤みを帯びている。日が傾いてきたのだろう。それに、先程まで聞こえた雨の音とかは聞こえなくなつていて。

恐らく、先程の雨はゲリラ豪雨と言う奴だつたんだ。いやはや、直ぐ止む雨だつたら洞窟の入り口で待つていても良かつたな。

少し悪態をつきながら俺は歩みを止めることなく洞窟を進んだ。そうして気がつくと俺は先程まで居た洞窟の入口に立つていた。
……何故だろ? 洞窟の最深部から入り口まであまり時間がかからなかつた気がする。俺の勘では行きで2時間掛かっていたのに、帰りは30分位に短縮した様な気がする。それに、同じ距離を歩いていたのにあまり疲れを感じていらない様な……それに、飴玉しか食べていないので先程まであつた空腹感が嘘のよつに消え去つている。
まあ、あくまでも俺の感覚だが。

……うん、難しいことを考るるのは後回しにして今は、

「寝よう」

全てを考えるのは明日だな~うん、そうじよ。もしかしたら無いと思つけれどすべて夢落ちという最初に捨て去つた仮説が正しいのかもしれないし。

少し現実逃避をしながら俺は洞窟の入り口で丸くなり、意識を手放すのだった。

「う、うーん……身体痛てえ」

翌日、俺を起にしたのは誰かの声でも光でもなく体中に広がる痛みであった。まるで筋肉痛を酷くさせたかのような痛みが俺の体を支配する。

ギギギと擬音がつきそつたほど軋む体に鞭を打つて無理やり体を起にした。

「……あれ？ なんだか昨日よりも視点が…高い？」

そのとき、昨日と比べて視点の高さが違うことに気がついた。昨日は地面ギリギリの高さに視点があったと思うのだが、今日は明らかに昨日よりも視点が高い。大体、自分の部屋のシングルベッドに寝転んだときの視点の高さくらいに感じる。

若干、昨日とは違つ様子に疑問を抱きつつも俺は洞窟の外を見た。太陽はすでに昇つており、森の中に木漏れ日が差し込んでいる。どうやら、昨日の雨も夜のうちに上がつたみたいだ。

そう結論付けた俺は筋肉痛のような痛みにこらえながらも洞窟の外へと歩き出した。別段、腹が減つたとかは無かった。しかし、その分かなり酷い喉の渴きを覚えたためだ。

それに、残念ながら最後の希望であつた夢オチは無くなつた。
まあ、最初から当てにはしていなかつたけれど。

兎に角、この地で暮らしていかないといけなくなつたんだ。水場を探しながらこの辺の地理を覚えること位しておかないと最低限生

きていけない。つーか、ついでに猫（？）になつた俺の食料も探しておいたほうがいいかもしない。

そう結論付けて俺は歩き出したんだ。だけれど、そこで一つ問題が生れた。さつきも言つたが、何故だか俺の体全身は筋肉痛のよつな痛みで思つように動かず、一步一歩出す脚も自分の足ながら少しおぼつかないんだ。

しかし、ここで歩くのを諦めてしまつたら必要最低限、生きていくための知識すら得ることができない。明日やればいいと思うかもしないけれど、昨日みたいに雨が降つたら何日も動けなくなるかもしれない。そうなつたら、水には困らないけれど餓死えいけいコースまつじぐらだ。流石にそれは御免被りたい。

痛む体に鞭を打ちながら俺は確実に一步一歩確実に脚を出して前に進む。その度に全身を剣山で刺されるよつな激痛が襲つてくるが、それは精神力でカバーだ。

もちろん今いた洞窟の場所を忘れないよつて頭の中でマッピングしておくのも忘れない。いつ見えても俺はマッピングとかは得意なほうなんだぜ。

……でも、もし間違えると困るからな。一応その辺に生えている木に傷をつけ……と……ツ！？

手ごろの木に傷をつけようと俺は爪を立てて木にあてがつた。

そしてその瞬間見てしまつたんだ。……俺の前足が昨日よりも確実に大きくなつていいということに。俺の記憶が正しければ昨日の前足は丸く、子猫のような小さくかわいらしい手だつた。しかし、今の俺はどうだ？

「おいおい、明らかに動物園で見たライオンみたく凶暴な

前足に変化しているんだけれど……」

毛に覆われた皮膚から嫌な汗が吹き出でくるような感覚が体全身を駆け巡った。

「そう言えば、昨日より視点も高くなっているんだったよな？……たつた一晩で成長したっていうのかー？…………ま、いつか」

うん、子猫のままだと色々と大変だし別に問題なくね？ それに、人間から猫になるって言うわけのわからん事態に比べたらそれほど驚くようなことじやないしな。

俺は急激な生長のことについては深く考えることなく、木に傷をつけるべく腕を軽く振るった。

イイ！――！――！

メキ…メキイ…バキバキバキイ

「……え、何これ怖い」

その瞬間俺は凍りついた。

「木……折れちった」

いやいやいや！ 折れちったじゃねーってのー！ なんだあこの木？ もしかして枯れきついてるものすごく脆い木だつたとか？ しかし木の断面図を見ると、途中まで鋭い刃物で切断したかのような滑らかな切り口になつていてる。

どんなに控えめに考えても誰かが途中までこの木を切つたというのがわかる。

「……なんか、一晩しただけで色々とぶつとみ氣味に進化しているなあ」

自分自身に言いしえぬ恐怖を抱きつつ、俺は前足に手を向ける。そこには、相変わらず数分前に確認したとおりの肉食獣を思わせるかのような凶悪な爪がある。

しかし、どんなに考え込んだとしても現状に変化が起きるわけではない。

俺は心のなかで盛大なため息を吐いたのち、再び水場を探すために先程よりも重くなつた感じのする前足を動かすのであった。

洞窟から出て一時間程経過しただろうか。 今日一日は食糧や水を調達するのに費やすであろうと考えていた俺の予定は早くも良い方に崩れ始めていた。

「つま…… ハレまた綺麗な湖な事で」

俺の眼前には今迄写真でしか見たことが無い様な綺麗な湖が広がっていた。 森が開けたそこは、規模としては野球のドームくらいの大きさであろうか。 その水は限りなく澄んでいて、淵から湖底をのぞき見る事が出来る程である。 そして、中には色とりどりの魚がいるのも確認出来る。

どうやら、此処にいれば飲み水には困らないだろう。 魚は…… いるのは確認出来るけれど、獲る手段はそのうち考えるとしまじょうかね。

取りあえず、渴いたのどを潤す為に俺はさっそく湖の傍まで行き舌を使って器用に水を飲み始めた。 何だか普通の水だつて言つのに、やけに美味しく感じられる。 やっぱり、そのモノに飢えていると得た時の満足感が半端無く大きくなるんだろうな。

勝手に自己解決した俺は、一心不乱に水を口へと運んでいく。 そういや知っているか、猫つて自分の舌を水面に叩きつけて跳ねた水を加えるんだってさ。 前に動物の特番で見たんだよ。 それで、俺も試してみたんだけれど、身体が猫だからか分かんないけれど、すっごく簡単に出来たんだよね。 ……うん、軽く人間から遠ざかつている感が否めないけれど俺は気にしないぜ！

口を少し止めて自分の状態に嘆く。 しかし、幾ら考えても考えはまともらず、正に堂々巡りな考えになってしまひ。

ふと、湖面に映った自分の姿に目を見張った。 毛の色は前足と

同じで銀色一色。耳はピンと立つていて顔の輪郭は猫だけあって、やはり丸っこい様な印象を受ける。

そしてその顔には……

「なんだこれ？ 模様のよう見えるけれど……」

丁度、額にあたるところだろうか、ローマ数字が幾つも重なった様な妙な模様になつてゐる。……しかし、模様つて言つよりも入れ墨に近いなこの形は。

「 つべづべワケのわかんねえ体になつてんな」

しかも、この顔の猫つて見たことねえんだけれど、銀色の毛色をした猫つて……灰色なら何種類か知つてんだけれどな。あれが、俺が知らない品種か何かか？

ガサガサ……

その時だ、妙な気配を背後から感じたのは、猫になつた所為で気配には敏感になつてゐるみたいで、後ろの妙な気配の様子が手に取るように脳へと伝わつてくる。

しかし、俺に対する敵対心は無いように感じる。つて言つか、俺の第六感が正しければ俺には全く気が付いていないと言つた感じであろうか。

まるでこの一つの気配が喧嘩しているような……そつ、言つのであれば俺は蚊帳の外と言つた感じであろうか。まあ、俺に対して不利な状況に働くなればそれで良いんだが、もし俺と言つ存在に気がついて危害が加わる様だったらソレはそれで困る。

俺は猫に「テフオルトで備わっている隠密スキルを（感覚的に）フル活用してその気配がする方に近づいて行つた。

傍まで行くと誰だかわからないが言い争つてゐるよつに聞こえる。片方は男でもう片方は女であろうか？ つて言つか、この姿になつて初めて言葉が通じる相手を見つけたんだけれど！

あ……だけれど、口論している最中に俺が割り込んだら『何コイツ？ マジKYOUじゃない？』とか『何だか美味そうな猫だな。よし、今日のランチはコイツに決めた！』とかになつたら最悪じやないかな？

……うん、もう少し様子を見るとしよう。 そう結論付けた俺は茂みに身をひそめながら声の主たちが見える位置へと移動した。

「だからいい加減、鬱陶しつて言つてんのよーーー！」

「キキキキ～久々の獲物を取り逃がしてたまる力！」

……うわ、何このカオス？ 余りの訳のわからん光景に一瞬だけ俺の意識がふゅ～ちやりんぐわ～るどしかけたぜ……自分で言つていて意味の分からん言葉だけれど。

と、取りあえず俺の田の前に起きている状況について説明しようと思つ。

まず女の声の主だ、俺は始め人間だと思っていたんだけれど、ソレはテンで違つたみたいだ。 なんと女の声の主は今の俺より小柄な体系の茶色い毛並みをした犬だ。 大体、動物園で見る狸くらいの大きさだと思つてくれて構わない。 ……いやいや、何で犬が喋つてんだよ！？ どこのわんわんストーリーだつてのーーー！

……あ、状況からしてみたら俺も同じか。

少しばかりトリップしていた俺は直ぐ様意識を戻して男の声の主

を見た。

…… そんでもって、男の声の主なんだけれど此方は人間か獸かと聞かれたら人間に近いんだが……いや、人間には分類しちゃいけないんだけどさ。 だつて、体長が1m位の小柄な奴で、耳の先っぽが鋭く尖っている。 もう既にこの時点で人間では無い。 更に目を引くのはつるつぱげな頭と人間にしては濃すぎるダークブラウンの体色。 そして、真紅に燃える白目の無い目玉、手には刃こぼれしまくのナイフが一振り……え、 どこのゴブリンですか？

どうやら話を聞いていると、 こうこう流れのようだ。

犬歩く ゴブリン遭遇 ゴブリン腹減つた お前（犬）頭丸かじり

だなうん。 ……うん、 食物連鎖つて素晴らしい。 いやいやいや、 何だか色々と論点がずれまくり立つての！

「だーかーらー！ 私は此処で終わるわけにはいかないって言つてんのよ！！ そんなにあたしの相手をしたいなら力ずくでそうしさいよ！！」

ちょ、 犬さん！ ソレ死亡フラグDeathよ！？ 本当に喰われちまいますよ（食物的な意味で）！？

ゴブリンはともかく、 同じ哺乳類として犬さんの無残な姿はみたくないなあ～ でも、 ここで助けに行つて下手すりや俺の命も危ないからな……

そんな薄情な事を考えていると、 2匹は同時に突つ込んでいた。

犬（？）は自慢の牙を遣い、 ゴブリンに噛みつく攻撃を繰り返している。 時折、 俺ほど鋭くは無いが爪を遣つて引っ搔く攻撃も織り交ぜている。 また、 軽い身のこなしでゴブリンのナイフを避け

ている。

一方の「ゴブリンは」と言つと、犬の猛攻を避けつつもあの切れ味の悪そうなナイフを振り回して犬に攻撃を与えようとしている。しかし、犬の素早さが勝つていて、致命傷を与える事が出来ずいる。寧ろ、あの細い腕や足を犬に噛みつかれてどちらかと言つてゴブリンの方がボロボロになつてきている。

どうやら、この勝負は犬の圧勝で終わりそうだ。この先に起る事を少し予想しつつもこの場から離脱しようとすると、ある一点に田を奪われた。

俺が居る場所から2匹が戦つている場所への丁度対角線上に何かが動いたように感じたのだ。

始めは氣のせいだと思い、少し意識を向けるだけにとどめたが、明らかに犬がゴブリンを追い込むたびにその動いているモノが2匹に近づいてきている。

そして、俺は見てしまったのである。その近づいて来るモノの正体を。

「（……………んな!?　もう一匹ゴブリンがいやがつたのか！……………と言つ事は）」

俺はもう一度戦つている最中の2匹へと視線を向けた。

恐らく、あの犬と戦つているゴブリンは囮なのだろう。そして、本命は犬が勝利を確信した瞬間に飛び出して一網打尽にする作戦に違いない。……ややこしくなるから犬と戦つている方をゴブリンA、潜んでいる奴をゴブリンBにしよう。

それにしても悪知恵が働くゴブリンズだ。……いや、生きるために必死になつた結果がこうなのだから仕方無いことだと思つ。しかしだ、オメオメと俺が田の前で同じ哺乳類を殺させてたまるかつたんだ。

その時の俺はさつきまで考えていた『自分の命が云々』と言つた事を忘れてしまっていたのは言つまでも無い。

俺は身を潜めていたゴブリンBに意識を集中した。多分、あのゴブリンBは出でていくタイミングを見計らつているんだ。俺の勘が告げている。犬がゴブリンAに対して止めを刺す瞬間、犬が勝利を確信した瞬間に事が起るって……そしてその瞬間は訪れたんだ。

第三幕（後書き）

ありがとうございました。今話は一人称に戻しました。

確認はしたのですが誤字脱字があると思いますので、見つけられた方はこつそりと教えて頂けると幸いです。

そして、文章の書き方……これは本当にリハビリな話になつていま
すね。今後も精進しなければ……

感想&ご意見&アドバイスはいつでも受け付けてあります。ではで
は、次回もよろしくお願いします

第四幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

人間は少し無茶をしても……いや、猫は少し無茶をするくらいが丁度いいという事がわかつた。

ゴブリンBが犬を襲おうと茂みから飛び出てきた瞬間、俺も同じく茂みから文字通り飛び出した。

犬は突然現れた俺とゴブリンBに驚いていたようだつたが、すぐに現状を理解し、たつた今相手をしていたゴブリンAの喉に噛み付いていた。

一方のゴブリンAはゴブリンBが現れるのは手はず通りだつたみたいだが、突然現れた俺を見て驚愕の表情をした。無理もない、この狩りは失敗^ハ死を意味している。

そんな中で超イレギュラーな俺が現れたんだからな。

俺は犬等を飛び越えると、同じく飛びあがっているゴブリンBの横つ面にこれでもかつて言う位の本気の猫パンチをお見舞いした。さて、ここで一つ考えてほしい。つい先ほど俺は木に向かつて軽く腕を振つた際、何が起きたのかを。

……まあ、何となくは想像できるよね。そう、俺が腕を本気で振るつたためゴブリンBの頭部は、まるでハンバーグを作る時、ミンチの中に手を突つ込んだような音と共に文字通り吹き飛んだ。ソレと同時に俺の前足には肉を潰す感覚が伝わつてくる。

次の瞬間、真っ赤に塗りつぶされた俺の視界、そしてドサリと音を立てながら地面へと落下していく何かが足りないゴブリンBだったモノのなれの果て。

……考えるまでも無く、ゴブリンBが死んだという事は理解出来た。

「以外と軟いかも？」

「 キキ！？ な、何だお前は！」

俺のつぶやきを無視するかのように犬と対峙していたゴブリンAが俺に向かつて吠える。 どうやら、余りにも急な出来事だった為に、犬も止めを刺し損ねてしまつたらしく。

そんな犬は突然の出来事だつた為に、今迄対峙していたゴブリンから目を反らして俺の方を目をまん丸にして見てている。

「お取り込み中の所失礼しました。 それでは、続きをどうぞ」

俺はソレだけ言い残すと、その場を後にしようときびきを返した。 そういえば、初めてみたとはいえ、生き物を殺した事に関してはそれ程嫌悪感を示す事が無かつたことに俺は内心驚いた。

それ以前に、ゴブリンなんてファンタジーな生物が居るという事実にも驚くべきだったのだが、この時の俺にはそんな考えは微塵にも気付く事は無かつた。

「キキキ！ ま、待ちやが

「待つのはアンタ……だつての……！」

「ゴブリンAの怒りに満ちた声と、その直後に犬の声が聞こえ、直後に『 ザシユツ！』という何かを貫くかのような生々しい音と、醜い『ギヤア！…』という断末魔が同時に聞こえた。 実際に視界に入つていなかつたからどうなつたかは予想でしかないが、ソレを俺は敢えて何も触れずに犬達を背にしたまま前に歩きだした。

しかし、水を飲みがてら食糧を探す筈だつたのに嫌なもんを見てやつちまつたな。 これからは自重しないといけないな、うん。

「ちょっとアンタ！」

まだ5mも歩いていない時、先程の犬が制止を求めるように声を発した。ソレは間違いなく俺に向ての言葉である。しかし、その声は先程ゴブリンAと話していた時とは違い、苛立ちなどは一切含まれていなかつた様に感じる。

「何？」

俺はある種の賭けに出た。犬猫と言わると俺が知つてゐる限りでは仲が悪い印象しか持つてゐない。まあ、例外的に仲良くしている動画はインターネットとかで見たことがあるけれど……

仮にこの犬が俺に対して友好的に接してきた場合、色々とこの世界の事について聞く事が出来るいいチャンスだと判断したからだ。

俺の予想……と言うよりも確信だけれど、この世界は間違いなく俺がいた世界では無い。だって、喋る犬や猫、はたまたゴブリンなんていうファンタジーに満ち満ちた生物がいるのだ。

事実は小説よりも奇なりといつことわざがある通り、今俺のいるリアルは間違いなく奇な出来ごとに溢れている。

そんな中、世界を知るなどの情報を抑える事は生きていいく上で限りなく有効な手段だ。

少しの間でそう結論付けた俺は、なるべく相手に不信感を与えるように後ろを自然な動作で振り返つた。

「ウオ、近ッ！！」

び、ビビッたぜ……振り向いた瞬間、俺の眼前には視野全体にどアップで先程の犬の顔が映し出されているのだから。

「……何よ、失礼しちゃうわね」

「いや、誰でも田の前に顔があつたらビビるつての」

犬に対してもいえ、真っ先に出た言葉が『近ッ』は流石に失礼だつたとは思う。

俺の対応に少し苛立ちを覚えたのか、犬は俺から少し離れて怒り気味な声を出した。

「まあいいわ。取りあえず、助けてくれた事に関してお礼でも言つて……ほしいかしら？」

……はい？

「全く何よ？ 急に出てきてゴブリンを仕留めたからつて良い気になつてんの？ 私は別に『助けて』なんて一言も言つて無いっての！ あんなのあたしの華麗なるステップで余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）で避けれたわよ！ 全く、これだからケット・シーは嫌なのよね～ 恩着せがましいつて言つかなんといつか……」

……何でか分からないけれど、ご立腹のよつだし帰ろう。

イキナリそっぽを向きながら訳の分からん言いがかりを付けられた俺の心は一瞬にして、この犬には関わるなど結論を付けた。

その後の俺の行動は早く、直ぐ様犬に背を向けて猫ならではの素早さでその場から立ち去った。

未だに俺がその場から離れていくのに気付かずに何かを捲し立てる様子を尻目に俺は一気にその場から離れていく。

遠くなつていぐ犬の姿が俺には滑稽に映つたが、そんな事を気にせず俺は前へと進み続けた。

途中で漸く俺がその場から居なくなつた事に気が付いたようだが、時は既に遅く、俺の姿は犬からは見えない位置まで移動している。後ろの方で何かを叫んでいるようだが、俺は敢えて何も聞こえないふりをして走る足を止めなかつた。

……あ、やつベ犬つて確か鼻がきくんだよな？ だつたら、俺の匂いを消しておかないと。

あのあと、俺はワザワザ遠回りをして先程喉を潤していた湖まできた。

そして躊躇なく、湖にダイブを決め込んだ。一瞬、猫つて見ずに濡れるのは苦手じやないのか？ と言う疑問が頭をよぎつたが、いざ入つてみると水は冷たく、プールに入つているような感じがした。

こんな水浴びで犬の嗅覚を誤魔化せるのか心配だつたが、モノは試しもことわざで言つからやるだけやつてみよう。

……しかし、さつき犬が言つていた言葉が気になるな。確かに『ケツト・シー』だつたか？ あんまり本は読まないけれど、ゲームとかの雑魚敵とかにそついつた名前の魔物がいたようないなかつたような……

でもつて、あの犬は俺に向かつてケツト・シーだつてたんだよな？ ……もしかして、猫じやなくて実は魔物フラグが成立した？

……ま、難しい事はあまり深く考えないでおこう。折角貰つた

セカンドライフだし、長く生きていれば自分が何者になつたか位は分かるだろう。

俺はそう結論付けると湖に潜つた。特に意味は無いが、何となく泳いでみたくなつたからだ。通常、猫は自分から進んで水に入る事は無い。まあ、例外として結構前に見たテレビではトラが水浴びをしている姿が映し出されていたが、ソレは本当に例外中の例外だ。最も、身体は泳ぐことに特化していないから泳ぎにくいつたらありやしないけれど。

しかし、今の俺はそれを色々と無視している状況だつたりする。全く、身体能力が猫以上になつていて、4足歩行をしても違和感を感じなかつたり、水に入つても大丈夫だし、極めつけは話す猫だと？

何処まで俺の体は魔改造されているんだつての。

俺は水中でそんな事を考えていた。そんな折、ふと浅い湖底に何か動く影を見つけた。一瞬『魚か？』と思つたけれど、直ぐ様それは違う事が分かつた。だつて俺の目に入つてきたのは……

「（蟹……沢蟹かな？　でも、少し大きい様な……）」

俺が見たものは紛れもなく蟹だつた。決してザリガニやエビでは無い、沢蟹だ。しかし、そのサイズに俺は少し驚いた。あまり蟹には詳しくないし、知つていると言つても小さい頃キャンプ場の近くにあつた川で遊んでいた時に見た蟹のイメージが強すぎて、沢蟹＝小さいという図式を成り立たせていた。

しかし、今俺の目の前にいるにはどうだろ？俺に背を向けているため此方には気が付いていないであろうかには明らかに30？を超えているように見える。爪に至つては片方が胴体と同じ位巨大なのである。

その瞬間だ、俺が今迄押えていた空腹を感じたのは。腹の虫がまるで自己主張するかのようにぐもつた音を立てている。

そんな俺が田の前の蟹を『食べる』と言つ結論付けるのに時間は必要なかつた。

魚を取るのは難しそうでも、蟹ならばこくらか勝機はある。それに、湖底とはいえ、大体深さが50?程の浅い所だ。きっと頑張れば俺でもあの蟹を取る事は出来ると思つ。

ただ、注意しないといけないのは明らかに凶悪そうなハサミだけだ。

その時、俺は犬に会つ前に木を切り払う程の鋭さがある自身の爪の存在を思い出した。

なんて事は無い、例え水中だとしてもこの体は色々とおかしな性能を持つている。だったら、ソレをフルに活用させて貰おうじやないか。

そうと決めた俺の行動は早かつた。なるべく気付かれないように俺は一度湖面にあがり、空気を吸つた後もう一度潜水をした。そして、ゆっくりと湖面を這つようしながら蟹の背後へと近づいた。

相変わらず蟹は俺に背を向けたままである。

これは幸いと、俺は迷わずに右前足を振りかぶり……

水の抵抗はあつたが俺のこの爪は難なく蟹の右側にある巨大なハサミを難なく、特に抵抗を感じるわけでもなく、まるで飴でも斬るかのように俺の爪はハサミを切り落とした

流石に蟹も俺の奇襲に驚いたらしい。しかも、武器でもある巨大なハサミを切り落とされてしまったんだ。残念ながら抗う術は無いと判断したのか、一度俺の姿を視認した後蟹ならではの横歩きで俺から逃げようとした。

しかし、そうは問屋が卸してたまるかつてんだ！ 折角見つけた食べられそうな蟹（食材）を前にして逃がしてなるものか～！

俺も当然の如く蟹を追う、先程切り落としたハサミを咥えた状態で追いかけまくる。

しかし、フィールドは水中。 どれだけ身体にスペックの差があったとしても、この場は蟹の庭と言つても良い場所だ。

結果的に俺は巨大蟹に逃げられてしまつた。 本当にあつという間に消え去つたとはこの事だと思つ位一気に差を広げられたんだ。 最も、これが陸上だつたらどうなるか分からぬし、俺も息が続かなかつたというのもある。

俺は渋々蟹から切り取つた巨大なハサミで我慢することにした。 まあ、我慢と言いながらもこのハサミ自体先程の蟹の胴体と殆どサイズが同じくらいなので、満足する事は出来ると思うけれど…… そう考えながら俺は蟹のハサミを咥えたまま陸に上がつた。 身体を振りながらまとわりついてくる水を振り払つた。

さてさて、どうやつてこのハサミを食べるとするかな……蟹のハサミを地面に置きどうやつて食べるのかを俺は思案した。

猫になつたんだから多分、生でも食べる事は出来ると思う。 だけれど、中々気が進まない。 いや、刺身で食べる分には抵抗は無いけれど……なるべく初めて食べるんだから火くらいは通したいんだけれど……

「 ハア ……」

どうするべきかを考えながら俺は軽く眼を瞑りながらため息をついた。 ……ん? 何だか少しだけ辺りの気温が上がつた様な気が……

俺はゆっくりと双眼を開いた。 そこには……

「（パチパチパチ）……何か木が燃えているんですけれど?」

一瞬、俺の目がおかしくなったのかと思った。 だつて、俺の目の前にある木に火が付いているのだから…… だつて、火の氣とか全くなかつたんだぜ？

なんだつてイキナリ燃えて…… いやいや、それどこのじやねえだろうが！

この火を早く消さないと山火事つてレベルじゃなくなるでしょうが！！

「ど、どいじょうー？ とと兎に角、水、それよか氷ー？」

その直後、今度は先程まであつた木が燃える音が消えて何だか辺りが気温が急に下がつたように感じる。

ふと、今しがた燃えていた木に目をやると……

「…… 今度は凍つているんですけれど？」

訳が分からなかつた。 だつて、急に発火現象が起きたり、その後に燃えていた木が冬でもないのにかちんこちんに凍つているのだから……

もしかして、この世界ではこういう不思議現象が頻繁に起きているのかとさえ思った。 しかし、現実的に考えて燃える事に関しては起きる可能性はあるけれど、流石に寒くも無いのに急に凍るなんて流石にある筈がない。

きっと、何かがあるに違いない。

その時だ、先程までなりを潜めていた俺の胃袋が『腹減つた』と言わんばかりに自己主張を始めたのは。 ……まあ、難しい事は後にして取りあえず今は食べる事を優先にした方が良いかもしない。 ふと、足元に転がっている蟹のハサミに目をやつた。 そこには

先程の発火現象の影響であろうか、凄く良い赤色に変色したハサミが転がっている。そして、俺は躊躇せずそのハサミに殻ごとかぶりついた。

行儀が悪いって言われても腹が減っていたんだから仕方ないじゃん。それに、色々と強化されているみたいなこの体からしてみたらこんな殻を噛み切る事くらい難しい事じやないと判断したからだ。まあ、結果的に殻は問題なく食べる事が出来た。それに、身の方もギッシリと詰まつていて味も濃厚で凄く美味しかった。しかし、問題が一つ……

「……猫だからな、猫舌なのはデフォルトな訳ですか」

以前は大丈夫だった熱い物を食べる事が出来なくなつたくらいであろうか。我慢すれば食べれない事は無いけれど、結構舌が痛い位に火傷をしてしまいました。

蟹の火の入りはかなり良かつたみたいだけれど、こういった弊害があるなんて予想外だつたな。

俺は仕方なく、早く覚めるように食べかけの蟹のハサミに向かって息を吹き込んだ。しかし、次の瞬間……

「……凍つた。蟹のハサミが?」

俺の眼前には先程の木と同様に……まるで冷凍庫にほおり込んでいたかのように力チンコチンに凍つた蟹のハサミがあつたのだった

「……え、俺の所為?」

取りあえず、呴かずにはいられなかつた。

第四幕（後書き）

ありがとうございました。

最後の方がグダグダになつてしましました。

そして、敢えて主人公猫をケット・シーと表記したのですが、一足

歩行では歩く事はありません。

この辺は追々説明を入れていこうかと思います。

ではあと、これからも応援よろしくお願ひします。

第五幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

あの時、犬が俺に向かつてケット・シーと呼んでいる時から何かがおかしいと思つていたんだ。

それに、唯の猫が腕を薙ぎ払つただけで木を切り倒したり、水中に潜つて活動したりして……しかも極めつけは息を吹きかけただけで蟹のハサミが氷結ですよ？ こりやあ、さつき木を燃やしたのも俺がやつたとみて間違いないかもしねない。

やあ、自分が唯の猫ではないと気付き始めた俺だ。

蟹のハサミを力チンコチンに凍らせてしまつた俺は、自分自身のことについて考えたところ、俺はただの猫ではないという結論に達した。あ、蟹のハサミは凍つたままおいしく頂きました。まあ、猫舌だから熱くなれば何でも食べられるみたいです。

しかしあれだね、ゴブリンがいる世界だ、猫が火を吹いたり物を凍らせてもおかしくないのかもしれたい。

……なんだかRPGに出てくる魔物を連想させるよね？

つか、確実に勇者に倒されるルートしか考えられない自分が悲し過ぎる……。考えるのはやめよう。

そんなこんなで、だいぶ話を戻すけれど蟹のハサミを食べて腹もふくれて、水で体を洗つた俺は今後の事について考えてみる事にした。

取りあえずは、寝るのは今朝まで使つていた洞窟で良いと思う。食べ物だつて火を吹いたり物を凍らせる事が出来るのだから、工夫すれば何とかなる筈だ。

……え、特に問題なくね？ まあしいて挙げるのなら、凶悪な肉食獣にあつて俺が御飯にならないよう注意をするだけだけでして

その時だ、聴力が人間の数十倍になった猫になつたからこそ感じられるほど小さくではあるが背後の湖から水が跳ねる様な音が聞こえたのは。 その刹那、今まで感じた事がない様な悪寒が身体全身を駆け巡った。

ソレが何かと考える前にその場からサイドステップの要領で一気に横へと跳んだ。 一瞬、風を切るような音が俺の耳に入ってきた。地面に着地した瞬間、俺は今まで自分が立つていた場所へと眼をやつた。 そこには……

『シュー・シュー』

俺が立つていた場所にはファンタジーな漫画やアニメでしか見た事がない様な金属製の棒が……水に濡れたソレは金属独特の茶色の錆も目立つが、生き物を殺す位造作もないであります。

……ぶっちゃけ、剣があります。 両刃剣ってやつですね。 そして、その持ち主は身体全身を緑色の鱗と皮で覆われており、造形は大きなトカゲが二足歩行でもしている様なものである。

そして、何を考えているのか分からぬ顔が不気味さを醸し出し、瞳も縦に割れ不気味さを助長させている感じがする。 ……はい、どこからどう見てもイメージ上はリザードマンにしか見えません。ここにもファンタジックな生物を発見してしまったぜ……

リザードマン（仮）は耳障りな空気が抜ける音と共に口から一又に分かれた舌をチロチロと出し入れしており、何となく俺に対して威嚇しているようにも感じられた。

「つて、考えたくないけれどもしかして捕食対象認定ですか！？」

その瞬間、リザードマン（仮）が剣を再び振り上げて俺の方を向いた。この場に居るのは危険だと俺は瞬時に判断し、バックステップの要領でリザードマン（仮）と距離を取った。

相変わらずリザードマン（仮）は何を考えているのか分からぬ表情で舌をチロチロ出し入れしながら俺の方を見ている。

何が何でもこの場から逃げなくては……つい先ほどゴブリンを一體たおしたとはいえ、あの時は滅茶苦茶奇襲だったし、しかも今回の相手は剣まで持っている。

……本当の事を言つと、俺の内心は恐怖でいっぱいだつたりする。じつはいつつて誰かが書いた小説とかだと厨一らしく武器にもめげずに突っ込んでいくのがセオリーかもしれないけれど、生憎と俺はそこまでいっちゃんしている訳ではない。

武器なんて持つた事ないし、ましてや剣を持つている人外に突っ込んでいく勇気も度胸もありはしない。

さっきのゴブリンの時の俺は絶対にどこかおかしかったからノーカンだ。

いい感じでテンパつていると、しひれを切らせたのカリザードマン（仮）が地を蹴り飛びかかりながら俺に向かつて剣を縦に振るってきた。

しかし、逃げようにも俺の足は恐怖で地面に縫い付けられたように動かない。……え？ コレって何て死亡フラグですか？

しかし、身体は動かないが何故だか考へる事に関しては何時よりも冷静に出来た。多分、色々と非常識的な事を目の当たりにしたせいでおかしな耐性が付いたのだろう。

兎に角、今は俺が生き抜く事を考えなければ……逃げる事が出来そうにない以上、このリザードマン（仮）を如何にか説得して俺に攻撃させないよつて誘導を……

そして、正に剣が振り下ろされる瞬間、俺は賭けに出た。

「ス、ストップだつてのーー！」

一瞬、この世界の生き物に英語が通じるのか不安だつたが俺の発した言葉によつてなのかりザードマン（仮）はその剣先を俺の鼻元でピタリと止めた。

やはり、顔には表情が現われておらず本当に怖い。しかし、折角出来たかもしれないチャンスなんだから棒にふるわけにもいかない。

「か、勝手に湖に入つたのは謝る。お、俺も腹が減つていてどうにも我慢が出来なくてな。で、でも生き物を殺したとかはしないし……まあ、蟹のハサミは頂いたんだけれど……い、いや、こちとら腹が減つていて見逃して貰えると嬉しかつたりするなあ……なんて」

言い切つてから考えたらかなり自分勝手な物言いだつたかもしれない。それに、この世界に来て犬とゴブリンには話が通じたけれど果たしてリザードマン（仮）に俺の話している言葉が通じているのだろうか？

俺が言いきつても尚、何も話さないリザードマン（仮）の様子に段々と俺は不安に駆られてきた。

そんな沈黙が数秒続いた後、リザードマン（仮）はゆっくりと口を開いた。

「……お前は我を討伐しに来たのではないのか？」

「……はい？ なんで俺が見ず知らずのアンタを倒さないといけなんだよ？ セツキも言つたけれど俺は腹が減つたからこじこに来ただ

けで……ソレに、もう腹が膨れたから自分の寝床に戻る所だよ

予想外にもこのリザードマン（仮）は俺が自分を狩りに来た者だと思ふ、襲ってきたみづだ。

それならば、幾分か俺が生き残る術が出来るかもしれない。

そしてリザードマン（仮）は俺の前に構えていた剣を治める

と無表情ぱりに申し訳なさそうな声で俺に話しかけてきた。

「すまなんだ、最近どいつも血の氣の多い輩ばかり相手にしていた
ものでな……お主も同じ氣質の奴かと……」

少し驚いた。背は大体150?~くらいのリザードマン（仮）が自
分よりも小さい俺に向かって頭を下げるなんて……

でも、どうやら俺が殺されるという最悪の事態は待逃れたらしい。
それに、このリザードマン（仮）って何だか話してみると結構い
い奴っぽいな。

「いや、気にしなくて良いよ、イキナリ来た俺も悪かったしな」

「うむ、感謝するが。 おお、そうだ迷惑をかけた礼がしたい。
何か我に出来る事があつたら言つてはくれぬか?」

「おお! ? 渡りに船とは正にこの事だぜ! まさか! ここに来てお
助けキャラが登場するなんて……それに、やつぱりこのリザードマ
ン（仮）は良い奴っぽいな。 いや、見た目は結構あれだけれど見
た目と中身は比例しないもんだな、ウン。

「それならさ、これからも腹がへつたらこの湖に来て蟹とかもらい
たいんだけれど……いいかな?」

「おお、それならば問題は無いぞ。
なんなら我が魚などを獲つて
届けるが?」

おおおー!? 更に良い事すべし! つかマジでこのコザケーデマ
ン(仮)さん良い奴じやんかー!

「悪い、頼んでも良いかな？」

「ハハハ、ソレ位の事は気にするでないぞ。
くらいしか知能を持つ魔物は居らぬのでな。
であるう？ 一人で暮らして居るのか？」

「まあね。……ところで一つ聞きたいんだけれど、俺つてケツト・シーカーなの？」
「つてか魔物つて何？ そもそも、こいどじー？」

何だかリザードマン（仮）さんが良い奴っぽいので俺は取りあえず、今必要な情報を聞きまくった。

ソレについてはリザードマン（仮）さんは間違いなく答えるのが難しこと/orたので、伏せておいた。

「ぬ？ どうしたのだ、お主はケジト・シーである？ らは習わなかつたのか？」

「うーん……それがさ、昨日までは話す事も出来ない猫でさ、つて
言つたが昨日以前の記憶云々も無くてさ……ソレが今日になつたら体
はでかくなつてゐるわ、話せるようになつてゐるわ、力が半端無く
強くなつてゐるわでさ」

まあ嘘は言つていないよね嘘は……

そして、俺の言葉にリザードマン（仮）さんは少し考え込むように眼を閉じた。

「……恐らく、身体が巨大化し、力が強くなつた云々に関しては昨晩の内に進化したのであるう」

「……はい？ 進化つてあの、

「昨日まで話せなかつたのであるう？ まあ、記憶云々は分からぬが何らかのショックで消し飛んだか……まあ、ソレは重要なことでない。 昨日、何か変わつたことをせんかつたか？」

「変わつた事つて……まあ、洞窟に入った位で……」

そんな俺の言葉を聞いて、リザードマン（仮）さんは無表情ながらも少し驚いたような顔をした。

「ほお、お主『試練の洞窟』に入つたのか？」

試練の洞窟？ 何だらう、凄く興味を注がれてしまつうな名前が出たんだけれど。

「『試練の洞窟』とはな、そのモノが心より求めるモノを具現化すると言われている洞窟だ。しかし、邪な想いを持つてゐる者が入ると、直ぐ様入口に逆戻りと言つ奇妙な洞窟でな」

邪な想いつて……俺はただ単に腹が減つたもんで、何か食べる物は無いかと入つただけであつて……それに、俺が思い描いていた食べ物は無かつたんだぜ？ あつたのは見たことも無い飴玉があつた

だけで……

「でも、最深部にあつたのつて変な飴玉が数十粒だけだぜ？ まあ、全部食べたらそれなりに腹が膨れただれど……」

「飴玉……なんだそれは？」

「え、飴玉が通じないの？ 英語が通じたのに何で飴玉が通じないんだよ。

俺は少し苦笑いをして、どうこう風に説明すればいいのかを考えた。

「えつとな……まんまるで、口に入れると甘い食べ物だよ」

「丸くて甘い物……それは、透明であったか？」

何か思ひ当たるものがある様で、リザーダマン（仮）さんは俺にそう聞いてきた。

「おひ、でもな甘い匂いだつたのに実際に食べてみると全く甘くねえんだが？ 全く、詐欺だよな～」

「ふむ……詐欺が何かは分からぬが

」

いつの間にか剣を腰に巻かれていたベルトに差し込んだリザーダマン（仮）さんは手を顎に当て何かを考えるようなそぶりを見せながら話し始めた。

「お主が食べたソレは……おやぢく『進化の実』だな」

「……何だか、また新しい単語を聞いた。 その進化のなんぢやうつて何？」

「うぬ、進化の実とは読んで字の如く進化を促進させるための実だな。 その実は甘い匂いを漂わせるが無味だとなんとか……まあ、他にも『成長の実』等と呼ばれる事もあるがな。 しかし、お主はついておるな。 今の時世に大量の進化の実に巡り合つとな」

……まあ、ようはその『進化の実』つて奴のお陰で話せるようになつたし、力もついたつて言う事か？

それつて、どんなRPGだよ。

「しかし、ソレを数十個食べたと言つておつたな？ ビツリでだ、お主のレベルがおかしなことになつておる訳だ」

レベルねえ……それなら大体分かる。 多分、俺の強さを数値化したもんだろ？ あ、でも何で俺を見ただけで分かるんだろう？

「お主の顔を見るレベルと言つ言葉は分かるが、何故見ただけで分かるのか？ と言つ事でも考えて居るのであるわ」

「うへえ、何故分かつたし！？」

「魔物にはレベルが存在しておる。 表示される部位は違うがお主の場合は額にソレが現われて居るようだ。 因みに、我の場合は……ホレ、この通り右肩に刻印されておるわ」

そう言つてリザードマン（仮）さんは右肩が俺に見えるように腰をかがめた。

……おお、本当だ、緑色の鱗に何だか入れ墨みたいなものが彫つ

てある。……えつと、縦線が5本か。

あれ？ でもさつき自分の顔を見たけれど、俺の額つて訳の分か
んない入れ墨が模様のようになに乱雑していた気がするんだけど？
リザードマン（仮）さんの言つ分にはソレが俺のレベルらしいん
だが……

「我は見てのとおりのレベル5だ。しかし、お主はケット・シー
であるにもかかわらず少なくともレベルが3つは超えてあるな」

……え、ソレってなんてチート？

リザードマン（仮）さんに冷静に返され少し現実放棄したくなつ
たりした今日この頃である。

「……ふむ、まあ難しいことは考えなくともよこ。 様は、お主は
望まぬままに強くなつてしまつただけだ。 わたし、口口せどじこかと
いう問い合わせ」

そこままで言つてリザードマン（仮）さんは開いていた口を閉ざし
た。

一体どうしたというのだらう？

そして、リザードマン（仮）さんはゆっくりと口を開いて、や
つくりと口を開いた。

「…………この地は『オリジン』、別名『始まりの地』とも言われ
ている地だ」

「オリジン……ねえ、えらくファンタジックな名称だ」と

「『ふあんたじっく』というのは何かは知らぬが、お主が何も知ら
ぬならちょうど良い。お主、我の仲間になれ」

そして、これが人間から遠くはなれた種族に生まれ変わ
った俺の人生の始まりになるのだった……

第五幕（後書き）

ありがとうございました。

かなり無理矢理な話になつてはいるのですが、ご了承ください。
試練の洞窟に関する謎は後々……そして、レベルの概念も後々……
何だか後々ばかりになつてしましました。

感想＆ご意見＆アドバイスはいつでも受け付けてあります。ではでは、
は、次回もよろしくお願いします

第六幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

何やら面倒くさい事になつてきたみたいだ。

やあ、いきなりリザードマンさんに仲間になれと言われた元人間、現ケットシーの俺です。

リザードマンさんによると、このオリジンは幾つかの群れが支配している地域のようにして、なんどこのリザードマンさんは湖周辺を支配しているリーダー的存在の様です！ ビックリだよね？

そもそも、このオリジンには下級魔物しか存在しておらず、レベル5のリザードマンさんは結構上位の魔物に分類されているみたいだ。……レベルが30と思われる俺つて此処にいて良いのか果てしなく不安に思つてしまつたぜ。

しかし、リザードマンさんが俺を仲間にしたいと思つたのは決して俺のレベルが高いからではないのだ。曰く、自分の仲間達が人間の冒険者たちに狩られたり、より自身のレベルを上げるためにほかの大陸へと向かつたために段々と仲間が減つていき、気が付いたら知能を持つ魔物がリザードマンさん一体になつてしまつた為らしい。

しかも、最近では縄張り争い等も激化しているみたいで、今まではリザードマンさん一体でも如何にかなつていていたみたいだが、今後は分からぬいそうだ。

その話を聞いて、俺はリザードマンさんと会つた瞬間に敵意を向けられた理由も理解した。如何やら、俺は縄張りを荒らしにきた魔物と判断されたみたいだ。

まあ、そんな理由があるのなら襲われても仕方ないかもしねないな。

「ところが、どうだ？ 仲間になつてはくれぬか？」

リザーデマンをこなすの場での返答を求めているみたいだ。

仲間になるメリットを少し考へると、食料確保のパイプができるところはおおきい。しかも、特定の団体に所属しておけば、何か有事が起きた際は、ある程度の擁護を期待してもいいかも知れない。

更に、この世界で生きるにあたつての常識諸々をリザーデマンさんに教えてもらえた。

反対にデメリットは、自由に動く事が制限される可能性が高い、繩張り争いに間違いなく巻き込まれる。ってところか？

しかし、自由に動けないつっても、元々ここには詳しくないから身の振り方を覚える間は間違いなくリザーデマンさんにお世話になるんだから問題にはならない。

それに、繩張り争い……わざのアグリンみたいに生き物を倒すのは気が引けるけれど、リザーデマンさん曰く俺のレベルはこの地では最強レベルに近いみたいなので、戦いになる以前に相手側が仕掛けてくる事が無い……つまりは案山子カカシになつて周りの勢力からの牽制になればいいのだから、これも問題にはなりにくいかも知れない。

つまりとにかく、果てしなくメリットが大きくてデメリットが少ないと判断できるわけか。

「……ま、これから魚などを頂けるんなら是非とも仲間になりたいんだけれど……それに、俺つてばこの辺に知り合いもいないし」

結論として、俺はリザーデマンさんの仲間になる事に決めた。

メリット、デメリット等もあるが、少しの間ながらリザードマンさんが結構いい奴ってわかったのも大きな要因だ。

俺が仲間になるとこう考えを出すと、リザードマンさんはあまり変化は見られないが無表情っぽい顔ながらも少し嬉しそうな表情を見せた気がした。

自分以外に知能がある魔物が居なくて話し相手もおりず、少し見しかつたと後に語ってくれた。

「そうか、ソレは良かった。……おおそれば名乗つておらんかったな、我はリザードマンのルジーナ。ルジーナと呼んでくれて構わぬ、これから宜しく頼むぞ」

あつさつと決めた俺に動じもせずに、リザードマンさん改めルジーナさんは先程まで剣を握っていた右手を俺に差し出した。感じとしては握手と同じだろ。

しつかし、ルジーナって……女性みたいな名前じゃね？

「むう……少し失礼であるぞ。我はこう見えても雌だ！」

おつと、考えている事が口から出でていたみたいだな……って女だつたの！？

話しか方とか男っぽかったし、声のトーンとかも結構低めだったからてつきり男だったとばかり思っていたぜ……いやはや、ソレは悪い事をしたもんだ。

「すんませんでした、それで俺はケットシーで？ 名前が……名前が……何だっけ？」

「ぬ？ どうしたのだ？」

すこしルジーナさんが手を出したまま怪訝そうな顔をして俺の方を見てきた。でも、おかしくない。

俺の名前だよな……えっとえと……あれ、何だつたけ？

……な、何ですか！？ 大学の講義の様子とかゲームの攻略法とか初期のロツマンのパズワードとか復活の呪文なら思い出せるのに何で忘れる筈のない自分の名前が思い出せないの！？

いや落ち着け俺、こういう時は息を整えるんだ～ヒツヒツヒツヒツ～……つてこれはラマーズ法じゃ！ ベタベタなボケかまさんでもよか！～

……うん、少しひとりみだしたな。でも、おかしくない……自分の名前がきれいにひつぱり思い出せん。

「名前……わかんねえ」

「名前……まあ、名とは自身を現す固有名詞だ。それほど重要視せずに自身で考えてみるのも一考ではないか？」

「うわ～お、途轍もなく投げやりな発言だぜ。でも、こんなにあつからかんと言つてやつぱり種族によつて違うのかな？ いや、そもそもケツトシーになつた俺に前世での人間の名前つて言つのもおかしいかな？ だったら、自分で考えるのもまたルジーナさんの言つとおり一考かもしれないけれど……

「因みに、ルジーナさんは名前つてどうされたんですか？」

「我か？ 我は元服する時に我自身で考えた」

元服とかカツ「こいな……こやこや、そりではなくてだな。 で

も、自分で考えたんだ……っていうか、リザードマンに元服なんてあるんだ。

いつその事、第一の人生の名前を自分で決めるって言つのも面白いかもしないな。まあ、根本的に自分の名前が思い出せないから仕方ないんだけれど……

そういう、ルジーナさんって何歳なんだろう? ……やめとこ、ハリザードマンとはいえ女性に年齢を聞くのはマナー違反だな、うん。

そんな事を考えると同時に自分の名前をどうするか俺は考えた。ここで余りにもカッコよすぎる名前とかにしても、後々名前負けしたら困るし、かと言つてあつたさすがの名前だと面白味も無いし。

自分の名前を考えていた俺はふと、ケットナーになつた自分の足へと眼を向けた。銀色の毛並みが僅かにだが濡れ、ソレが太陽に反射してキラキラと輝いている。

ああ、さっきまで水に入つていたからなとつぶやいた時に、俺はハツと閃いた。そのまんまじやんと突つ込まれること請け合いだが、ある意味で今の俺にはぴつたりの名前かもしれない。

その名前は……

「『ギン』……うん、俺の名前はギン。俺が決めた今決めた。……どうよ、この名前？」

俺は片方の口角をグイッと引き上げながら、軽く笑みをつくるようにしてルジーナさんを見た。

「ギンか……自身の毛色から取つたのだな？ 良い名ではないのか、ではギンよこれからよろしく頼むぞ」

そして、俺とルジーナさんは固く握手を交わした。といつても、俺は握る事が難しい足の構造をしているので、ルジーナさんが握つただけなんだがね。

と、まあここで終われば『そつか、頑張れ～』ってな感じで終わるんだけど、ここで少しばかり予想外なことが起きた。

「漸く見つけたわよケットシー！ アンタ、私に黙つてなに勝手にどつか行ってんのよ！…」

何やら、すごい形相をした先程の犬がこの少し和やかな場をぶち

壊しながら乱入して来たのだから。

……今日の教訓。

『一難去つてまた一難』^{ことわざ} という諺は以外とバカにならない。

第六幕（後書き）

ありがとうございました。

かなりグダグダ感が漂つ回になってしましましたが、ご了承ください。

リザードマンの名前に関しては察しの良い方ならば何となくわかる仕様となつております。

もし、わかつた場合はコツソリと紙に書いて「△△△箱へポイしてくださいね」

感想&ご意見&アドバイスはいつでも受け付けております。ではでは、次回もよろしくお願ひします

第七幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のものです。

第七幕

「あのや……取りあえず話し合わない？」

「うひゃい黙れ！」

「ギン、少し黙つてもらえぬか？」

やあ、気が付いたらケットシーになつていてリザードマンのルジーナさんと仲間になりたてほやほやの俺改めてギンだよ。

今俺の前ではルジーナさんと雌の犬が激しく言い合つてゐる最中なんだ。両者ともに、牙を光らせたり、眼光を鋭くしてなど、一触即発の状況だつたりする。

……え？ いきなりすぎて分からないつて？ 大丈夫、俺もどうしてこんな状況になつたかは……何となくわかるね。

だつたら説明しろつてか？ まあ、そんな難しい話じやないんだけれど……取りあえずは、回想シーンへ

「漸く見つけたわよケットシー！ アンタ、私に黙つてなに勝手にどつか行つてんのよ！…」

事の始まりは、ギンが一匹の犬（？）を助け出したことから始まつた。彼は何も考えずに手を貸してしまったようではあるが、彼女にどつてはそもそも言つていられない状況なのだ。

彼女のレベルはこの地では決して低くは無いのだが、この場にいる3体の魔物の中で最も低いレベル3だ。

最も、彼女はその事を知る由も無いのだが……しかし、そのレベルという概念があるからこそ、彼女はギンに対して憤怒していた。

そもそも、ケットナーという種族は元々が非力な種族であり、とてもではないが単独でゴブリンを討伐するなんてまねは出来ないのだ。

しかし、目の前にいるギンは不意打ちとはいえ、ソレをこともなげに前足を少し振るつだけで倒してしまった。

そう、簡単に言えば彼女は自分よりもレベルの低い種族が自分よりも簡単にゴブリンを仕留めてしまつたといつ事実に対して怒つていたのだ。

至極簡単に言つてしまえば……

「なに、私より弱いくせしてしゃしゃり出でてんのよアンタは！」

「！」

……と、言つことである。

この一方的にも聞こえる物言いに對して当のギンは出来るだけ簡単に済ませようと考えていた。確かに、一方的な感じのする物言いに聞こえるが自分が余計な事をしたのは事実であり、通常ならばアレは放置するというのがこの世界での常識なのかもしれないと認識したからだ。

なので、この場で自分が謝罪をすれば事は簡単に済むと踏んでいた。しかし、それに対して納得できない者がこの場に一体だけ存在した。

「ふむ、そう言つのであればお主はギンより強いのか？」

つい先ほどギンの仲間となつたばかりのリザーデマン改めルジー
ナその人であつた。

彼女とて仲間になつたとはいえ、当初はギンの問題にあまり深
入りしないでおこつという考え方であつた。

だからこそ、今現れた犬（？）には自分の縄張りに入ったこと
に関して追求をしなかつたし、追い出そうともしなかつた。

しかし、寛大な彼女にも許容できなことを犬（？）は口にし
てしまつた。

リザーデマンは通常、十数体の群れで生活するのが常である。
仲間がいなくなつた彼女は例外中の例外ではあるが。
更には仲間意識というものが強く、仲間の侮辱は自分の侮辱とも
とつてしまつ種族なのだ。

そんなおり、種族が違つとはいえ彼女ことつての唯一の仲間とな
つたギンに対しての侮辱ともとれる発言にまさすがの彼女も黙つて
いることはできなかつた。

「誰よ、アンタ？」

まるで、今ルジーナの存在に気が付いたといわんばかりに振り向
く犬（？）。

勿論、ルジーナは半ば無視されている状況で面白くないし、何よ
りも他人を見下しているその目が気に入らなかつた。

「我はお前が『弱い』などとのたつておるギンの仲間だが何
か？」

「へえ……リザードマンだって、このケットシーなんかと仲良くしてんのだ。 バツカじゃないの？」

その瞬間、ギンの耳には間違いなく切れてはいけない『何か』がキレてしまつたような音がした。

「それに、私がそのケットシーより強いかつて？ そんなの当たり前じゃない！ どこの世界にケットシーよりも弱いウルフがいるつていうわけよ……」

「ほお、ウルフだったのか？ 悪いな、あまりにも大きさといい器量といい『小物』染みていたのでな、てっきり私はそこの人間に飼われている犬と思っていたようだ」

ハツハツハと悪びれた様子もなく、むしろ挑発せんとばかりな発言をしたルジーナ。 すでにギンは、この場の空氣があまりにも重たくなつていると悟つて一步下がつて事の顛末を見守つている。

一方のメスのウルフは明らかに挑発と分かつていながらも、自身を侮辱されていると悟るや否や猛烈に反撃に出た。

「はん！ どこの馬の骨……ああ、ごめんなさいね『猫の骨』とつるんでいる『トカゲモドキ』に種族を見分けるなんて頭がないわねえ？ ごめんなさいねえ、気がきかなくて！」

明らかに一触即発の状態である。 そして、この不毛ともとれるやり取りを経て……

「ガルルルルルル……」

「シュー・シュー……」

「……今に至るわけと」

なぜに、話の中心人物の俺をおいてけぼりにしながら自分達で話を進めているのでしょうか？

色々な意味でめまいを憶えたが、今はそれどころではない。ともかくにも一人の暴走を止めなければいけない。

「はん、そこまで言つのならアンタ等のレベルを言つてみなさいつての！ どうせケットシーは1レベルでリザードマンの方は2レベルか、よくてアタシと同じ3レベルってところよな」

あ、それ死亡フラ……

そう言いながらウルフは胴体の左半身が見えるように回転した。なるべく、確かに胴体の左側に縦線が3本入っているな。

しかしルジーナさんは5本の線があつたし、俺にいたっては複雑な図形状態になっている。ルジーナさん曰く、俺のレベルは30レベルと言うことだから、ウルフのレベルは決して高いわけではない。

だけれど、この自慢の仕方を聞くに、3レベルってのはこの辺りではそれなりに高いのだろう。

だったら『わ～スゴ～い』くらい驚いた方がいいのかもしれないな。

それで、このウルフがいなくなるなら簡単だ。

よし、さうと決まればさつさと実行に……

「わ～す」

「

「お主の皿は節穴か？ ああスマン、どうやらその皿は飾りのようだ。……ギンよ、ここに居ては埒があかぬ、行くぞ」

……見事なまでに俺の作戦が爆散した瞬間であった。そして、何故かルジーナさんは俺を小脇に抱えてウルフから離れるように歩きだした。

「クッ……舐めぐさつてー……いいわよ、そこまで叫ぶなら決闘よーー！」

流石にウルフはそのまま俺たちを帰してくれるとこいつよりもなく、俺たちの前に回り込んで『決闘』と、なにやら物騒なことをのたつちまわっている。

つてか、このウルフが決闘って言つた瞬間から何やらルジーナさんの目が先ほど以上に細くなり、マジで恐ろしそうになつてているのですが、大丈夫かな？

「ほう……ガキが我に歯向かおうと言つのか？ 悪いが我は女子供でも容赦はせぬ、我に牙をむく以上はその息……確実に止めるが良いのか？」

ルジーナさんは俺を地面に下ろすと、自分の腰に掛けてあるボロボロのロングソードを構えてその切つ先をウルフの鼻先へと向けた。流石のウルフも何かヤバイ空氣を感じ取つたのか、一瞬体をビクつかせたが、ここまで来てしまつた以上後には引けないのだらう。

「は、はん！ アンタなんかボツコボコのギッタングギッタンにしてやるんだからね

「ケットシーーー！」

「つて、俺かよーーー？」

「

第七幕（後書き）

ありがとうございました。

今話は今までで一番短い文章となってしまいました。ご了承ください。

さて、この先々も考へていて、……考へた話を自動で書いてくれる機会があつたらほしいところですね。
マジで自分の文才のなさに落胆しまくりです。

感想&ご意見は隨時受け付けております。お気軽にどうぞ。

ではでは、次回もお楽しみに～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277v/>

弱いからこそ強くなれる！

2011年10月8日09時06分発行